

『かさこじぞう』論

— 岩崎京子の再話に見る物語性 —

小山 恵美子

帝京大学教職大学院 〒192-0395 東京都八王子市大塚359

要 約

岩崎京子作『かさこじぞう』は、昭和57年から小学校国語教科書に採用されるようになった。その経緯と、民話を教科書教材として使用することへの批判について述べ、果たして『かさこじぞう(岩崎京子)』は「民話」なのか、という点を問題点として提示した。さらに、これまでの読みのとらえ方でよいのかということにも触れ、教材としての価値を再度検討してみたいと考えた。

研究の方法としては、「人物を読む」、「プロットを読む」、「意味・語りを読む」という観点で作品の分析を行い、『かさこじぞう(岩崎京子)』の特性、教材としての価値を再検討した。また、原話としての「笠地蔵」との比較を行い、岩崎の『かさこじぞう』がもはや民話としてではなく、物語として再話されたことを踏まえて、教材としての価値を見いだす必要性を見いだした。岩崎京子は、昔話を再話する際に、「語り手」や「読み手(聞き手)」の願いを大切に、昔話に命を吹き込む作業をしたのではないか。ここに、昔話として語られる「かさこじぞう」ではなく、人間を描いた文学としての『かさこじぞう』成立の意味があるととらえる。

さらに、いくつかの実践報告を基にして、実践の方向性を検討した。

キーワード：小学校国語教科書、民話・昔話、国語教科書批判、作品分析、物語文学、
イメージを育てる読み、教材研究

はじめに

「かさこじぞう」が、最初に国語教科書に掲載されたのは、1959(昭和34)年のことである。そのころはまだ無署名の「かさこじぞう」であったが、1977(昭和57)年から岩崎京子作として4社の教科書に2年生の教材として一斉に掲載される。現在に至るまでにさらに他社の教科書にも掲載されたり逆に掲載を外されたりをしながら、現在も教科書教材として採用されている息の長い教材の一つとなっている。^(注1)

「かさこじぞう」が教科書教材に取り上げられるようになった経緯は、前掲書^(注1)に詳しい。松崎正治によれば、主に当時の民話ブームと民間教育研究団体が進めた教材の自主編成運動に起因しているということのようである。さらに、教材化された民話については、教育的配慮の名のもとに本来の民話らしさを失ったものになったという批判や、政治的立場からの教科書攻撃も起こった。岩崎京子作の『かさこじぞう』については、その批判の代表例として、「新・憂うべき教科書問題」の中で石井一朝が述べている部分を以下に示す。

それなりに聞けば悪くもない話だが、岩崎は、これを「貧しいものどうしの連帯感や思いやり」といったかたちで子どもに教えなければならぬとし、これを「私の心を通過させた昔話の再創造」だといっていた。「再創造」と言えば聞こえはよいが、これでは昔話の「党派的ねじ曲げ」ではないか。

石井は、さらに、「しいたげられた者の話」がある勢力の人たちによって作られた「副読本」から採用されたことを取り上げて「党派的」という言葉を使い、さらには民話独特の「暗さ」を指摘して教科書の教材としての不適切性を問題にしている。

また、安藤操は、民話をどのように授業で扱うかという観点から岩崎京子の『かさこじぞう』に疑問点を見だし、原話の「笠地蔵」と比較・再検討を行うことを通して批判をしている。その批判の内容の大筋を以下のようにまとめてみた。^(注2)

①『かさこじぞう』はいくつかの採集記録を参考にし書き上げた作品であり、特定の一地域の昔話を肉付けして味わいを豊かにした再話ではない。(風土性の薄さ。内容の盛りだくさんさ。大歳の市で売ら

れているものの不自然さ。など)

- ② 地蔵様が擬人化され、生きている存在のように幼い子供に語られている。
- ③ 昔話の語りであっさりと言られるところが、表現が工夫されることによって民話独特の語り口や面白さが半減してしまっている。

以上のようなさまざまな方面からの批判を受けながらも、『かさこじぞう』は、今なお存在感のある教科書教材として採択し続けられている。確かに「民話」は、その特徴的な語り口や人物や情景の描かれ方によって、物語教材とは扱いを異にする場合もあり、どう授業を行ったらいいか悩むこともある。その原因として、読みのめあてとなりうる人物の心情や性格などが、すっきりと、一般化した形で描かれているため、学習課題として設定しにくい面がある点があげられよう。

しかし、岩崎京子の『かさこじぞう』は果たして「民話」として位置づけてよいものなのか。そのあたりの検討が必要なのではないかと思われる。以下、作品の分析を通して、岩崎京子の『かさこじぞう』の特性、教材としての価値を再検討してみたい。

1 問題の所在

真夜中にしんと降り積もる雪。その雪のかすかな音に混じって遠くから聞こえてくる何ものかの掛け声…。しかもそれが徐々に大きくなり、こちらに近づいてくる…。「六人のじぞうさかさことってかぶせた…」と歌っているのは一体誰か。それがわからないじいさまとばあさまの二人にとっては、最初は不気味で恐ろしいことであつたであろう。その音が自分たちのうちの前でびたっと止まる。続いて「ずっさん ずっさん」と何かが落とされる。雪に沈むような重たい音だ。ここまでを目で見るのではなく耳だけで聞き、暗い中で想像している二人がいる。昔話「かさこじぞう」のクライマックスともいえる場面である。

このお話は「じいさまとばあさまは、よいお正月をむかえることができましたと」で終わる、読み手にとってはめでたしめでたしの昔話であるが、この二人の立場に立ってみたら何とも不思議で、もしかしたら恐ろしくさえあるできごとであつたであろう。読者には「じぞうさま」の姿は見えているのであるが、二人にはそれは分からない。普通は動くはずのないものが真っ暗な中を動いてくることはとても恐ろしいことであるが、このお話には読者にそう思わせない温かなものを同時に感じる。

なぜ動くはずのない「じぞうさま」が動いたのか。石の地蔵を動かしたものはいったいなんだったのか。単に

「良いことをしたじいさまとばあさまに地蔵様が褒美をくださったお話」では語りつくせない何かがあるのではないだろうか。

2 じいさま、ばあさまと地蔵様との共通性 (人物を読む)

「昔々」で始まる昔話。『かさこじぞう』は、各地に伝わる民話を岩崎京子が再話したものである。「あるところ」とは、いつの時代かの地方の農村に位置する村であろう。特に、寒い冬は乏しい蓄えで細々と暮らす、北国の村かまたは山間部が舞台である。また、農民は、米や粟、野菜を作る農業を生業としながらも、貧しさを強いられていた時代の物語である。

季節は、暮れの大晦日。折から降ってきた雪が、夜中にはしんと積もってくる。じいさまとばあさまが住んでいる村は、市などが立つ町からは隔たった場所である。道端に六地蔵が立っている村はずれは、野原の中にあり、人里離れたさびしい場所である。雨風を防ぐお堂もなく、木の下の木陰に立っているわけでもなく、この地蔵様は常に風雨にさらされている過酷な環境にある。

じいさまとばあさまはというと、同じようにつらい日々をおくっている。日頃から貧しく、「その日その日をやっと」暮らすその日暮らしの生活であることに加えて、正月を目前にしながら食べる餅もない。つく米もないし、買うお金もない。ただ「夏の間に刈り取っておいたすげ」があるばかりである。「すげ」は、食べ物ではない。主に屋根をふいたり、笠や蓑を作ったりする材料となる。それを使って何かを作って売り、お金に換えないと食べ物が無いという切迫した状況である。

そのような危機的状況でも、この二人にはあまり慌てた様子はない。座敷を見まわし「ほんに、なんにもありやせんとう」という様子からは、いつもと同じ日常に動かないのんきさすら感じられる。しかし、いいことを思いついて、二人はとにかく熱心に笠を編む。できた笠は五つ。年とった二人にとっては、精一杯の仕事であつたであろう。この「五つ」の笠がその後のドラマにつながっていく。

登場人物はじいさまとばあさまの二人である。それに、「じぞうさま」が加わるが、「じぞうさま」は途中までは石の物体であり、民衆の心の支えとしての偶像である。二人は、至って善良な民衆として描かれる。貧しさに愚痴をこぼすでもなく、助けを待っているのでもない。「なんぞ、売るもんでもあれば」と言いながら策を練り、刈り取っておいたすげで笠を編む。それが、この切迫した状況で見いだした唯一の年を超す道であつた。

しかし、その笠は市に持っていったにもかかわらず全く売れず、じいさまはそのまま持ち帰ることとなる。考えてみれば当然のことで、時は「大晦日」である。いくらたくさん人がいても、欲しいものは正月を過ごすための餅や臼や杵、お飾りの松などである。「年こしの日にかさこなんて…」とじいさまはつぶやくが、それしか方法がなかったのだ。しかし、最後の頼みの綱は役には立たず、それに追い打ちをかけるような吹雪に見舞われる。

ここに出てくる人物は、「じぞうさま」たちも含めて極めて過酷な状況にいる。しかも、ともに貧しい、寒風にさらされているという共通点がある。そこにこれらの登場人物を結び付けるしかけがあり、お互いを思いやる心も生まれたのだといえよう。

3 地蔵様の身代わりとしてのじいさまの行為

売れなかった笠を背負って、じいさまは寒い道を歩いていく。「とほとほ」ではなく「とんぼり とんぼり」歩くじいさまの様子には「もちこ買ってくるで」といって出かけたときの力は感じられない。正月の用意もできず、ばあさまががっかりする様子を想像すると、足が前に出ていかないのであろう。「もちこもたずに」の「も」には、最低限必要だったものも買えなかったという大きな落胆が感じ取れる。さらに、冷たい吹雪がじいさまを襲う。売れなかった笠を被ることもせず、じいさまはとにかく帰り道を急いだのに違いない。

その途中出会った「じぞうさま」が、雪に埋もれるようにして立っていたのである。しかも「六人」と記述されていることから、じいさまの目に「じぞうさま」があたかも人のように見えていることを読み手は感じとるのであろう。じいさまは自分が濡れるのもいとわずに、「じぞうさま」のお世話をする。「お気の毒に」「ござらっしゃる」と敬意を表しながら、頭、顔、肩、背中を順々に撫でていく。雪を掻き落とすじいさまの手や指は、さらに冷たくかじかんだことであろう。

そこで、売るつもりでもってきた笠を「じぞうさま」に被せることを思いつく。無償の思いやりである。しかも、足りない笠の代わりに自分の「つぎはぎの手ぬぐい」を捧げる。「つぎはぎ」は「貧しさ」の象徴であり、「おらのでわりいが」とじぞうさまを気遣い謙虚にわびるじいさまの姿は、善良な庶民の気持ちの象徴でもある。自分の行為に満足して、「安心して」帰るじいさまは、「じぞうさま」に対し、これがわが子であったらというように接している。いわゆる地蔵を信仰する信心深さもある一方で、このときのじいさまにとって「じぞうさま」はそれを超えて、命あるものとして存在している。「おきのど

くに」、「さぞつめたかろうのう」は石の地蔵さまにかけ言葉ではない。その後のじいさまは、頭から冷たい雪を被り、雪まみれになり、まさに「じぞうさま」の身代わりようになって家まで辿り着くのである。

帰ったじいさまは、笠が一つも売れなかった話に続き、「じぞうさま」がいかに大変な状態であったかをばあさまに話す。さらに、笠が一つ足りなかったこと、自分の手ぬぐいでそれを補ったことを話したのであろう。ばあさまは、正月の用意ができないことを嘆くこともせず、「ええことをしなすった」と冷え切ったじいさまをねぎらう。「なぜ、一銭にもならないものにやってしまった」などと、ばあさまはじいさまの行動をとがめない。さらには、「さぞつめたかろう」とじいさまと全く同じことばで「じぞうさま」のことを思いやる。その上でじいさまをいろいろのそばまで誘う。ばあさまがじいさまと同じ立場だったら、おそらく同じようなことをしたと想像できる。この二人は、同じ価値観を持って貧しい日常を生活している二人なのだ。

さらに、餅どころか何もない年越しの不安を打ち消すように「餅つきのまねごと」をし「漬け菜」と「お湯」の夕食を済ます。おそらく何度も噛み、おなかを満たしたつもりになったのであろう。(まさに、「赤貧洗うがごとし」である。)しかし、この二人に、貧しさ故の暗さや卑屈さは、みじんも感じられない。あるのは、良いことをしたという自分たちの行為に対する満足感のみである。貧しいにもかかわらず笠が売れなかった、寒いのににもかかわらず笠をあげてしまったという常識を超えた行為がストーリーの次なる展開につながっていく。ここが『かさこじぞう』の面白さの一つである。それは、単なる「やさしさ」「おもいやり」では代弁できない、二人の夫婦の「無償の愛」ともいえるものであろう。

4 地蔵様の行いの意味するもの (プロットを読む)

物語は、「ある年の大晦日」という年越しの一日を描く。場面は、村のじいさまとばあさまの家から町の市場へ、村はずれの野っ原を歩いてじいさまの家へと展開する。

- ① 売りに行くための笠を作るじいさまとばあさま
(村・じいさまとばあさまの家・日中)
- ② 笠を売りに行くじいさま
(町・大年の市・日暮れまで)
- ③ 地蔵様に売り物の笠を被せるじいさま
(村はずれ・野っ原・日暮れ)
- ④ お湯を飲んで休むじいさまとばあさま
(村・じいさまとばあさまの家・夜)

⑤ 地蔵様からの贈り物を受け、良いお正月を迎えたじいさまとばあさま

(村・じいさまとばあさまの家・真夜中)

この①から④の場面での一つ一つの出来事を、「じぞうさま」は直接体験したこと以外にも、どこかで見ていた、または感じていたということが分かるように物語は描かれているが、そのことは⑤の場面からわかる。

⑤では、夜中に二人は不思議な物音を聞く。初めは、「じよいやさ じよいやさ」とそりを引く掛け声である。かすかに響いてくるその音は、「長者どん」のうちの年越しの品物を運ぶ音ではなく、自分たちの方に近づいてくる音なのだ。さらに耳をすまして聞いていると、次は、「地蔵に笠を被せたじさまのうち、ばさまのうち」と自分たちのことを言っているような歌である。でも、まだその正体は分からない。じいさまとばあさまは、この時点ではまだ外を見ていないからである。その次の「ずっさん ずっさん」という物音に関しても、語りは「何やら重いものを」と言い、明らかにしていない。じいさまとばあさまにも何がどうなっているのかよく分かっていないことを表している。

物語は、二人が兩戸をあけて外を見たときに初めて、何が起こったのかが分かる仕掛けになっている。二人にそのわけが分かるのは、窓から「じぞうさまたち」の後ろ姿を見た時である。二人に分かったこと、それは…声の主はあの「六人の地蔵」であったこと、「じぞうさま」が二人のために正月の用意してくれたことである。言い換えるとこの時点で「じぞうさま」はすでに石ではない。じいさまの行為が「じぞうさま」に息を吹き込んだのであるともとらえられよう。または、じいさまが雪の中で地蔵さまに接した時点から、じいさまたちにとってはじぞうさまは既に石ではないのだ。さらに、「じぞうさま」たちには、二人の貧しさも、何のために笠を作ったかも、市場に行って何を見てきているかも分かっていたということが分かる。「じぞうさま」たちには、二人の暮らしが見えていた。だから、そりの荷物が「餅、にんじん、ごんぼ、お飾りの松など」の正月用品であったのだ。「地蔵」とは、そのような民衆の身近にいて、民衆の願いを聞く存在なのである。まさに、「じぞうさま」が善良な民衆の代表であるような二人に褒美をあげたような結末である。

しかし、二人の暮らしがこれで豊かになったわけではない。今後も二人の生活は困窮するのであろう。昔話としては、何の解決の策も二人には与えていないのであるが、寒く暗い背景とはうらはらに温かい二人の心が読み手の心まで温かくする。だから、ここにきて読者は安心して物語を読み終えることができるのである。大切な

はものの豊かさではなく、心の豊かさであり、さらに言えば、じいさまの行為とそれを褒め称えたばあさまの優しい心こそ、地蔵菩薩の教えそのものではないかと考えられよう。日本には古来から「地蔵信仰」がある。「地蔵信仰」とは、「地蔵は現実世界と冥界の境に立って、人を救う」ものであり、また「地蔵」とは、「現実と冥界との境にあって冥界へ行くものを救う」ものとされ、昔話の世界にあっては「人々に福を授けるものとして描かれている」とされる。^(注3) まさにじいさまの身を挺して地蔵様を救う行為は地蔵のすべき行いそのものであったのだ。

5 「かさこじぞう」成立の意味を問う (意味・語りを読む)

「語り」は、民話の語り手としてのストーリーを語る。一貫してじいさまとばあさまの行動を説明的に語る役割である。しかも、「せっせとすげがさをあみました」「じいさまも声をはり上げました」「しかたなくじいさまは帰ることにしました」「ばあさまは(じいさまに対して)いやな顔一つしないで」とじいさまの視点で語り、心まで語ろうとはしないが肯定的に見守る立場をとっている。

「じぞうさま」に対して、「語り」は、「じぞうさまが立っていた」と言い、あたかも人間がそこに立って雪に埋もれているような表現の仕方をしている。また、「お堂はなし、木の陰もなし、吹きさらしの野っ原もんで」と、「じぞうさま」の哀れな様子を強調して言い表している。一方で「語り」は、「じぞうさま」には何も語らせない。ただ、その行いで「じぞうさま」が何を言いたいかを読み手に伝えようとしている。前述したように、「じぞうさま」たちがじいさまとばあさまのもとへ向かう叙述は、二人の立場になってみると、この世の出来事ではないような不気味さを感じさせる。

しかし、じいさまたちの目に映ったその後の「じぞうさま」たちの姿は、一変して何となくユーモラスでもある。重いそりを引いてきたときの力のこもった「じよいやさ」の掛け声は、重い荷を卸して役目を終わった後は、軽く、リズムカルな響きに変ったであろう。そして、その声を出しているのは、笠を被った五体の「じぞうさま」と手ぬぐいを被った一体の「じぞうさま」である。まさしく、じいさまが笠と手ぬぐいを被せたあの「じぞうさま」たちであることが分かる。手ぬぐいを被った「じぞうさま」も一人だけ違ったものを被ったままの姿で再度登場する。ここも何となく笑いを誘う場面である。二人はその姿をぼかんとした顔で見送ったであろうか。涙

を流したであろうか。または、手を合わせて拝んだのかもしれない。そこは、読み手がさまざまに想像して良い場面であろう。

『かさこじぞう』という作品は、その絵本の解説に岩崎自身が「老夫婦が心をよせあい、信頼し合う姿には、ほのぼのと胸があたたまるようです」と書いてあるところから、多くの場合、「物質的に貧しくとも、精神的な豊かさを失わないじいさまとばあさまの心温まるお話」であり、「逆境に負けないうまくましい民衆の話」だととらえられてきた。「日本文学教育連盟」の松田哲は、そのことを次のように述べている。^(注4)

(老夫婦の、貧しい暮らしを生き抜いている「心のゆとり」と「したたかさ」を取り上げたあと) それ以上に大きいのは、この老夫婦がお互いに心を寄せ合い、信頼し合って生きているところに、心の豊かさの源泉がある。読者は、信頼し合って生きる姿に美しさを感じ、心を打たれるのである。(中略)

民話「笠地蔵」は、全国各地に伝えられてきた。その多くは、貧しい暮らしのじいさまが地蔵に笠を被せ、それをばあさまが快く受け入れる。そして、正月の品物を地蔵からもらうというものである。これには、貧しい生活を強いられてきた農民の、せめて、正月ぐらいは、人間らしく迎えたいという願いが込められており、その願いがこの話を生み、その思いで語り継がれてきたものと思われる。まさに、民話の心である。

また、じいさまたちの行動については、「自分たちが(じいさまたちが)辛い生活を強いられているため、他の人間(この場合は地蔵様)の苦しみを他人のことだと思えることができなかつた」とも指摘している。さらに、ある実践で紹介されている「実践の意図」には、次のようなとらえ方が示されている。^(注5)

どのような逆境にあっても、明るさとやさしさを失わないたくましい人間像、しなやかな生きる強さというものをふたりの生き方を通して二年生のこの期の児童に、はっきりイメージとしてつかませておきたい。貧しさの中にある明るさ、思いやり、仲がいいということをも美として気づかせたい。

これらのとらえ方を単に否定することはできないが、果たして「じぞうさま」の行いはじいさまたちへの「お礼」なのか、じいさまたちの行為に対しての「感動」なのか。

私は、「じぞうさま」を動かしたのは、実は「読み手」なのではないかととらえる。もっといえば、伝承文学を継承してきた「語り手」たちなのではないだろうか。「じぞうさま」が見ていないものまでを知っているように、あたかも感じているかのようにさせているのは実は「読み手」であり、「語り」である。この物語の意味するところ

は、単なる「報恩譚」や「地蔵信仰」の具現化ではない。じいさまとばあさまの行い、それこそが非現実のできごとを越えたところにある「人間愛」であると、民話を通して「じぞうさま」が人々に教えている。そして、そのような「じぞうさま」を創りだし、動かしたのは、ほかでもない、物語として伝えた民衆の「願い」だったのではないか。岩崎京子は、昔話を再話する際に、「語り手」や「読み手(聞き手)」の願いを大切に、昔話に命を吹き込む作業をしたのではないか。ここに、昔話として語られる「かさこじぞう」ではなく、人間を描いた物語文学としての『かさこじぞう』成立の意味がある。

6 岩崎の『かさこじぞう』の独自性

さらに、「岩崎」の『かさこじぞう』におけるじいさまの描き方に着目し、そこに「岩崎」がどのような人間を描こうとしたのか、その意図をとらえてみたい。取り上げるのは、じいさまが吹雪の中のじぞうさまに出会い、笠をかぶせる場面である。いくつかの「かさこじぞう」の原型や再話をこの点において比較して見ると、その場面の描き方に顕著な違いがあらわれているのがこの場面だからである。いくつかの「かさこじぞう(笠地蔵)」を次に示す。

一つ目は、関敬吾作『日本昔話集成』の中の「笠地蔵」である。^(注6)

来るが来るが来るど、野中の地蔵さまが、雪こかぶって頭から濡れて立ってゐた。これを見ると爺さまは、やあやあ、お地蔵さまし、それではさぞ冷たかべなす。丁度ここに笠をもってるがら、おあげ申すべど、五つの笠をみんなお地蔵さまにがぶせ(ママ)、あどの一つのお地蔵さまには、継ぎはぎだらけの自分の古手拭こをおかぶせ申して家さ帰って来た。…

ほぼ原話に近い昔話であるため、人物の心情、心理は表現せずに、事実のみが時間の推移とともに語られる。ここでのじいさまの行為は、地蔵さまに声をかけたこと(「冷たかろう」と、持っていた五つの笠と継ぎはぎの手拭いを六人の地蔵様に被せたこと)の二点である。

稲田浩二・稲田和子再話の『日本昔話百選』(笠地蔵)では、同じ部分を次のように記している。尚、この資料は、子どものための読み物ではない。稲田の言葉を借りれば、「飾り気のない暮らしのことばで語りつがれ」る昔話を、「語り」の口調を大切に継承しながら編纂した昔話集であるといえよう。成立も、岩崎の『かさこじぞう』よりあとになる。^(注7)

途中、野中に六体のお地蔵さんが仲ようならんでござったと。おじいさんが、

「あーあ、お地蔵さま、これではさぞ寒かろうに」
 と言うて通り過ぎたが、どうもかわいそうでならん。
 (中略：ここでは家で編んだ炭俵を売りに行く途中で
 雪を被った地蔵さまを見て、俵を売ったお金で笠を六
 つ買って被せるという設定になっている。) 帰りがけ
 に、お地蔵さんの頭の雪を払って、みんなに一つずつ
 笠をかぶせてあげた。「お地蔵さん、これで温うなった
 なあ」とおじぎをして帰って来たと。

「言葉をわかりやすい共通語に」近づけて再話された
 昔話であるが、会話などには語りの調子が残されている。
 「関」の「笠地蔵」と比べると、「お地蔵さんの頭の雪を払
 った」といった具体的な行動と「お地蔵さんが温くな
 った」という言葉が示されるが、「岩崎」のそれとは違う。
 そして、「岩崎」の『かさこじぞう』である。^(注8)

じいさまは、とんぼりとんぼりまちをでて、むらのは
 ずれののっばらまできました。

かぜがでてきて、ひどいふぶきになりました。

ふとかおをあげると、みちばたにじぞうさまが六に
 んたっていました。

おどろはなし、木のかげもなし、ふきっさらしのの
 ばらなもんで、じぞうさまはかたがわだけゆきにも
 れているのでした。

「おお、おきのどくにな、さぞつめたかろうのう。」

じいさまは、じぞうさまのおつむのゆきをかきおと
 しました。

「こっちのじぞうさまは、ほおべたにしみをこさ
 えて、それからこのじぞうさまはどうじゃ、はなからつ
 ららをさげてござらっしゃる。」

じいさまは、ぬれてつめたいじぞうさまの、かたや
らせなやらをなでました。

「そうじゃ、このかさこをかぶってください。」

じいさまは、うりもののかさをじぞうさまにかぶせ
 ると、かぜでとばぬようあごのところでむすんであげ
 ました。

「むらのはずれののっばら」の様子は、「じぞうさま」
 とじいさまをとりまく過酷な状況が「ふきっさらし」や
 「かたがわだけゆきにもれている」という叙述で鮮明
 に分かるように表現されている。さらに、じいさまの「じ
 ぞうさま」に対する行動は、傍線の部分で示したように、
 具体的な行動で描かれている。「じぞうさま」の様子をつ
 ぶさに観察し、声に出していたわるところや「かきおと
 しました」、「なでました」の言葉からは、じいさまが一
 緒に感じている冷たさが読み手にも伝わってくるように
 思われる。また、点線の部分は、じいさまが「じぞうさま」
 を思いやる語りかけの言葉である。原話にはない「おき
 のどくに」という言葉や、「しみ」という言葉から、「じぞ

うさま」の体が傷を負っているような臨場感がある。「つ
 らら」は人間に例えれば鼻水である。それが凍ってしまう
 ほど寒いのであるから、「じぞうさま」が風邪をひいて
 しまう、もしくは凍えて死んでしまうといったようなこ
 とをじいさまは案じているのではないかと感じさせる。
 また、「おきのどくに…」とじぞうさまに敬語を使いなが
 らも、「おらのでわりいがこらえてください」といって「つ
 ぎはぎのてぬぐい」を被せるじいさまのことばからは、
 貧しく過酷な状況を共に生きる仲間意識のようなものが
 生まれていることが感じ取れよう。じいさまにとって「じ
 ぞうさま」は、ここにきて信仰する存在を超えて共に生
 きる共同体としての存在になっていったのである。ま
 さに、じいさまの行為は石の「じぞうさま」に命を与える
 行為であった。こういった展開や表現は、「岩崎」の『か
 さこじぞう』の大きな特徴である。

民話・昔話は、もともと人間や人間の心理を描いたも
 のではない。稲田が『日本昔話百選』の中でも述べてい
 るが、語り手は「幼い魂に呼びかけ、幼な心をおどらせ
 る話があった」のであり、そのような過去の民衆の
 魂を背負いながら、その継承を未来に託したものであ
 った。岩崎は、そういう民話・昔話の形態を借りて、「地蔵
 様が民衆を救ってくれた」「良いことをするとよい報い
 がある」といった民衆の願いを伝えるのみならず、人の
 心を、困っている人にできる限りのことをしてあげるよ
 うな人の生き方として伝えようとした。これが、岩崎が
 『かさこじぞう』を通じて表現したかった「人間」なの
 ではないだろうか。

他に大川悦生作の『かさこじぞう』などもあり、「岩崎」
 作の『かさこじぞう』によく似た叙述になっているが、「岩
 崎」の『かさこじぞう』のあとに書かれているため、大川
 が岩崎のものを読んで参考にしているということは十分
 にあり得る。^(注9)

7 「ここだ ここだ(じいさま)」の問題

最後に、教科書本文の問題をとりあげておきたい。そ
 のことが教科書改ざんの問題のみでなく、「実践への手
 引き」ともかかわってくると思われるからである。

教科書における『かさこじぞう』の改訂に関しては、す
 でに鶴田清司により、次のように紹介されている。^(注10)

教科書の『かさこじぞう』の本文は、『むかしむかし
 絵本3 かさこじぞう』(一九六七・五 初版 ポプラ
 社)をもとにしている。かつて何度か教科書本文の改訂
 があったが、特に昭和五十八年版から大きく変わった
 (そして六十一年版では教科書会社全五社の本文がそ
 の形でほぼ統一された)。例えば、次のような所である。

- ・ お金にかえられんかのう。→もちこ買えんかのう。
- ・ もちこどっさり買ってくるで。→傍線部削除
- ・ じいさまもまけずに声をはり上げました。→傍線部削除
- ・ じいさまが、思わず、「ここだ。ここだ。」と大声を出したら、うた声はぴたりととまりました。→全文削除

これらはじいさまの人物像にかかわる表現だけを取り上げた部分である。これについては、「じいさまの無欲さをよりいっそう強めようとする」もので、「再話者の意図がより鮮明になった」という評価もある一方で、人物像との抵触はなく、探している地蔵様に自然に呼応したものとす指摘もある。鶴田は後者の指摘を取り上げ、「改訂前の方が庶民のたくましさ、生きる力のようなものが表れていて話にリアリティが出ている」と述べている。

確かに、前の三カ所の叙述の改訂と合わせると、教科書にする際に「じいさま」であるにもかかわらず意欲に満ちあふれたどちらかという勝ち気な人物像に見えてしまうところに違和感があったことは想像できる。「もちこ買ってくるで」「じいさまも声をはり上げました」の方が、読者が「どのくらい」や「どのように」を想像できるおもしろさがある。「ここだ。ここだ。」を「民衆のたくましさや生きる力」ととらえるのは、そこに結びつけたがための解釈のように私には見えてしまう。むしろ、「どこだ。」と寒い中尋ねてきてくれているものに対する自然なやさしさととらえる方にリアリティがある。

さらに、『かさこじぞう』のもととなった民話・昔話を探してみた。

『日本昔話集成 第二部 本格昔話2』によると、「大蔵の客」という項の中に岩手県の昔話として「笠地蔵」が収録されている。^(注6) それによれば、「かさこ」が「糸臍」となっていること、その「糸臍」と笠売りの「笠」とを交換することになったこと、最後の荷物は「お米、肴、お金」であったことの三点に違いがあるのみで、あとは「かさこじぞう」と大きな違いはない。「ここだ。ここだ」の呼び掛けもない。ただ、最後に「これも、お地蔵さまへ爺さまが功德をしたからだどいふ話。どんど拂え。」がついていて、「じいさまの行い」は「功德」であり、それがお地蔵さまからのいただきものになったという解説が付いている。北は青森県から南は熊本県まで幅広く分布していて、地蔵さまがいかに信仰されていたか、またいかに民衆にとって身近な存在であったかがわかる。物語の展開の型としては、

- ① 貧乏なじいさまが正月の買い物に行くと地蔵さまが雪(雨)に濡れている。
- ② a買い物の金で笠を買って被せる。

b家に連れ帰る。

- ③ aばあさまも喜び、食うものはなくても寝る。

bばあさまは怒る。

- ④ a夜中に地蔵さまが宝物、金銀、米、餅を運んでくる。

b地蔵さまの鼻や腹から米が出る。

- ⑤ じいさまとばあさまはよい正月を迎える。

- ⑥ aばあさまが米をたくさん出そうとして、地蔵さまの鼻をつついて失敗する。

b隣のじいさまがまねて失敗をする。

といった類型があるようだ。他にも、地蔵が川に流される話やお米はじいさまが死ぬまで出続けたという話もある。教科書や絵本等で見られる『かさこじぞう』は、「かさこ」「もちこ」とあるように、主に東北地方の昔話がもととなって再話されていると考えられる。

8 実践への手引き

『かさこじぞう』の実践は、数多く報告されているが、その多くは十数時間を要して段落のまとまりごとに読み進め、人物の心情や情景を創造するものがほとんどである。加えて、最後に主題について考えたり、最も印象に残った箇所を音読したり、まとめの感想を書いたりして単元を閉じる形をとっている。^(注12~15)

こういった歴史的实践の検証と詳細な教材分析を行いながら、鶴田は「詳細な読解を越える授業」をめざす方法として、「じいさまとばあさまのやさしさが分かるところはどこかを中心的な発問に設定し、観点を明確にして短時間で授業を行うあり方」を提唱している。^(注10) 時間がかかると子どもは飽きてしまうであろうというのがその論の趣旨である。確かに無駄に長い時間をとる必要はないという点については賛成であるが、問題は時間が必要かどうかであり、どのような言語活動を行うかということであろう。また、二人の「やさしさ」を否定することはできないが、「やさしさ」という類型化した観点から二人の行動を再検討してよいのかという問題もあるように思う。もちろん、初発の感想などで「二人はやさしい」という感想は当然出てくることは予想される。そこから、その「やさしさ」の質を問うというのであれば、そのような展開も考えられなくはない。

私は、二つの読みの学習活動を考えてみた。一つは、当然と言えば当然であるが、音読・朗読・劇化を通して読みを深める活動である。主な活動は声を出して読むことであるから、目標として誰かに読んで聞かせる場を設定する必要がある。下学年や幼稚園・保育園児を対象にしてもよいし、保護者に参観してもらおう場にしてもよい。熱心に活動する意欲の基となろう。子どもたちは意

外に早く叙述を覚え、語りたいうようになる。それが、民話・昔話のもつ文体の力なのであろう。音読・朗読することで、子どもたちが「語り」を体感することができる。

どのように音読するか、朗読するかを話し合いながら読み進めるが、子どもたちから出てきた「問い」を取り上げて読みを深める時間があってもよい。さらに、朗読する児童たちの前で、数名の子どもに演じさせてもよいであろう。どのような場面を子どもたちは演じたいというであろうか。最初のじいさまとばあさま、傘が売れなくてがっかりするじいさま、「じぞうさま」にかさこをかぶせるじいさま、あいどりのまねをして歌うじいさまとばあさま、そして最後の場面のじいさまとばあさまの様子などは、せりふを考えたり、心情を考えて演じたりすることがよい話し合いの場面となろう。例えば、「ここだ、ここだ」をどう取り上げるか、または取り上げないかを子どもたちに考えさせる。取り上げた場合の効果と取り上げなかった場合の効果と両方がある。また、去っていくじぞうさまを、二人はどのように見送ったであろう。手を振る、拝む、これでお正月を迎えられる、じいさまのおかげだとばあさまが褒めるなどさまざまな活動が予想される。そこから、子どもたちが何を感じ、つかみ取っているかをとらえるよい材料となろう。

もう一つは、読み進めながら「じいさまとばあさまにどんなことをいいたいか」を思い浮かべ、話したり書いたりする活動である。

民話・昔話は、民衆の願いを具現化した文芸であるということは、先に述べた。読み手である子どもたちは、じいさまとばあさま、「じぞうさま」に寄り添って読むことで、当時の民衆の暮らしや願いを追体験することができる。深川明子氏は、「イメージを育てる読み」を実践の過程で検証していく中で『かさこじぞう』に触れ、次のように述べている。^(注16)

実は、この物語は、そういう読者の感情(願望)が、次のエピローグで語られているのである。幸せになってほしいという願いが熱烈であればあるほど心は落ち着かない。したがって、幸せになったことが確認されて読者は初めて安堵するのである。そして、物語から安心して離れることができる。

その意味で、この物語のエピローグにおけるイメージ化は、テキストの内と外との複雑なからみ合いの中でおこなわれることになる。

じぞうさまが、現実には動くはずのないことを知りながら、二人の幸せを願う私たち読者は、福の神である地藏様の行動をありえたこととして是認しようとする意識が働く。読者がイメージ体験から脱皮して、二

人が対象人物となったとき、二人に対する愛着が生じる。二人の幸せを願う心は、読者が自分で創りあげた物語の現実を正当化しようとするはたらきでもある。

(中略)

子どもたちは、二人が幸せになったことを、心から喜び、それは、この二人にとっては当然のことであると、その理由を踏まえて読んでいく。

すなわち、読み手である子どもたちは、読みの過程でしだいに頭の中に描いた物語のイメージを抜け出し、「じいさま」とばあさまを外側から見つめる存在となっていく。この二人がこのままでお正月を過ごすなんてことがあってはならない…という感情を読者がもつことが大事で、その願いが形象化した形が「じぞうさま」だととらえることはとても自然な理解の仕方である。話し合いの中で自然に「二人に自分がもちこをあげたい」といった発言も出てくることがあるが、「二人に言いたいこと」が学習を通して積み重ねていくと、気の毒なじいさまを励ますことば、心やさしいじいさまをほめたことば、二人と一緒に幸運を喜ぶことばなどが出てくるであろう。また、「じぞうさま」たちをいたわったり、「じぞうさま」に感謝したりすることばも出てくるであろう。それこそが、民話を作り、継承していった民衆の心を感じることといえるのではないだろうか。

本研究は、教材研究の一環として試みたが、教材研究は、教材価値のある素材を発掘すること(教材発掘)、これまで教材とされなかった分野のものを教材として開発すること(教材開発)、と並んで、すでに教材として使われているものに満足せず、さらに新しい学習の可能性を教材の上を探るという意味^(注17)の「教材再読」に当たるものとして位置づけたい。さらなる教材再読のための素材を見いだしていくことを今後の課題としたい。

注

- 注1 松崎正治(1995)「かさこじぞう」の教材史。「小学校国語教科書における文学教材の史的研究」(財)教育調査研究所
- 注2 安藤操(1980)(一)「かさこじぞう」(岩崎京子)再話の視点—その都会的発想の限界—。「国語教科書批判」三一書房
- 注3 稲田浩二他(平成6年)日本昔話事典 弘文堂
- 注4 松田哲(1989)かさこじぞう(岩崎京子文)。「文学作品の指導計画と実践2年」日本文学教育連盟 あゆみ出版
- 注5 小林香織(1979)かさこじぞう。「文芸の授業 小学2年生」西郷竹彦監修 明治図書

- 注6 関敬吾 (昭和22) 日本昔話集成 第二部 本格昔話2 角川書店
- 注7 稲田浩二・稲田和子 (1971) 日本昔話百選 三省堂
- 注8 岩崎京子 (1967) かさこじぞう ポプラ社
- 注9 大川悦生 (1998) 新訂子どもに聞かせる日本の民話 実業之日本社
- ちょうど、そのとき、じいさまは六体の石のじぞうさまが、雪をかぶって、すぐ道ばたに立ってござらしたのに気がつきました。うすくらがりのなかで、よくよく見ると、六じぞうさまはあごのところに、つららまでさげておられましたと。
- 「じぞうさま、じぞうさま。雪コかぶって、なんぼかさむかんべなス。」
- じいさまはひとつひとつ、じぞうさまのあたまの、雪をはらいました。あごのところにさがったつららも、きれいにとってあげました。それから、しょってきたあみがさをおろすと、
- 「売れもうさねかさコで、すまねどもよ、これかぶってしのいでくださっしゃれ。」といって、じぞうさまにかぶせました。(後略)
- 注10 鶴田清司 (2001) 「まずしさ」と「やさしさ」の世界—『かさこじぞう』(岩崎京子)の〈解釈〉と〈分析〉—。「文学の力×教材の力小学校編 2年」西郷竹彦監修 教育出版
- 注11 成田徹夫 (1991) 文芸研ハンドブック17 かさこじぞう 明治図書
- 注12 長谷川 峻 (1997) かさこじぞう。「味わう力を育てる文学作品の授業」日本文学教育連盟編著 あゆみ出版
- 注13 小黒黎子 (1981) かさこじぞう。「文学重要教材の授業展開 小学1・2年」全国国語教育実践研究会編 明治図書
- 注14 原島勝子 (1986) かさこじぞう。「文学教材の授業選集 6巻」須田実編著 明治図書
- 注15 海崎義隆・日浦成夫 (1996) かさこじぞう。「教材研究の定説化28 『かさこじぞう』『白いほうし』『おむすびころりん』の読み方指導」科学的「読み」の授業研究会編 明治図書
- 注16 深川明子 (1987) 「イメージを育てる読み、阻害する読み—「かさこじぞう」の実践分析。「イメージを育てる読み」 明治図書
- 注17 田近洵一 (2009) 国語科の教材。「実践へのヒント 国語科授業用語の手引き」中原國明他編 教育出版